

九州地域の教育ファーム推進に向けて

～教育ファーム推進方策～

平成23年8月30日

九州地域教育ファーム推進協議会

目 次

I	はじめに	1
II	九州地域の教育ファーム推進に係る現状	2
1	教育ファームの取組効果	2
2	教育ファームの取組及び参加の意向	7
3	教育ファームに係る基本認識	9
III	九州地域の教育ファーム推進にあたっての課題と対応方向	10
1	指導者や体験の場の確保への対応	10
2	取組方法に対する知識・経験不足への対応	16
3	取組における運営上の問題解決への対応	19
4	教育ファームの実施が難しい都市部への対応	22
5	教育ファームの効果等についての普及の必要性	26
6	取組に対する参加者確保への対応	28
7	消費者ニーズへの対応	29
IV	おわりに	30

I はじめに

農林漁業を生業とする方の指導を受け、二種類以上の農林漁業作業を年間2日以上かけて体験する教育ファームは、一過性のイベントにとどめることなくできるだけ多くの生産プロセスの体験を行うこと等を通じ「自然の恩恵や食に関わる人々の様々な活動への理解を深めること」等の食育効果が発揮される農林漁業体験活動です。また、教育ファームは子どもたちの「生きる力」を育てることが明らかになっています。このようなことから、食育基本法(平成17年法律第63号)に基づき平成18年3月に決定された食育推進基本計画においては、市町村における教育ファームの取組の計画的実施が数値目標化されました。また、本年3月に改訂された第二次食育推進基本計画においても、教育ファームを積極的に実施するよう農林漁業者等に求めています。

九州は教育ファームの推進を計画的に行うこととしている市町村の割合が高く、全国の中でも教育ファームが盛んな地域です。しかし、小学校で広く実施されている教育ファームが中学校等上級校になるにつれ実施率が大きく低下するといった生涯食育の視点から見た継続性の問題、都市地域における実施率が低いといった地域的な問題等九州においてもまだまだ課題が見られます。

以上のような問題意識から、九州地域教育ファーム推進協議会では平成22年3月より検討を重ね、これからの九州地域の教育ファームの推進方策について提案をとりまとめました。この提案を農林漁業、教育、食育に関わる多くの方々にご覧になっていただき、多くの方々に教育ファームの推進に関わっていただくことを期待しています。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災からの復興に当たっては、被災地域・コミュニティ主体の復興を基本とするとともに、被災者、被災地の住民のみならず、今を生きる国民全体が相互扶助と連携の下でそれぞれの役割を担っていくことが求められています。その中で私たちは「絆」をどう深めていくか、共に生きる力をどう鍛えていくかを問われています。私たちにとって最も身近な「食」が実は様々な人々の活動や労苦に支えられていることを理解し感謝の念を深めていくこと、地域の中でつながりを強めていくこと、教育ファームを通じたこのような学びが、平成23年3月11日以後の日本に生きる私たちに必要な「絆」の土台づくりにつながるはずです。私たちは、こうした思いからも、教育ファーム推進の必要性を訴えます。

九州地域教育ファーム推進協議会

Ⅱ 九州地域の教育ファーム推進に係る現状

1 教育ファームの取組効果

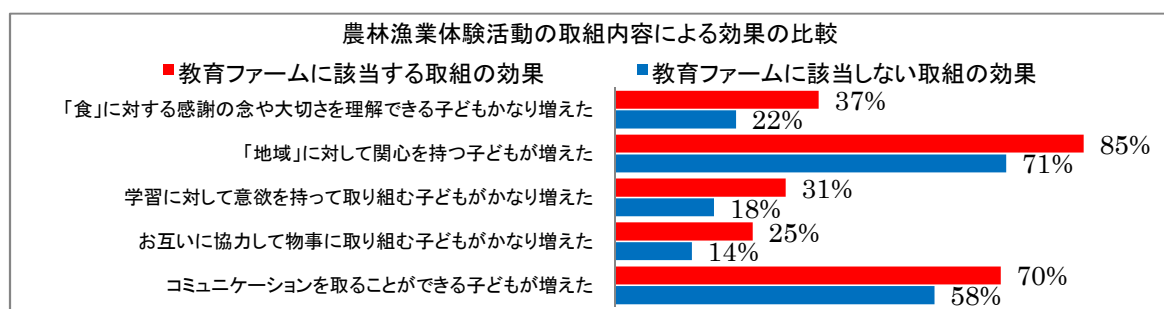
今回、九州管内の小・中学校等を対象に行ったアンケート調査により様々な効果があることが分かっています。

- ・ 教育ファームには、「食」の大切さを実感し、自然の恩恵や食に関わる人々の様々な活動への理解を深めていくという食育効果があります。子どもたちに対する教育ファームにて、「食に関する感謝の気持ちが深まった」「食べ残しが少なくなった」といった効果や、「農業への理解」や「郷土への親しみ」「地域への関心」が深まるといった効果が確認されています。
- ・ また、教育ファームは子どもたちの「生きる力」を育てることが確認されています。「何事にも一生懸命に取り組む」「学習に対して意欲を持つ」「自分のことは自分で決める」といった様々な問題に積極的に対応し解決する力や、「お互いに協力して物事に取り組む」「コミュニケーションをとる」といった他人と協調・協力していく力が育まれています。
- ・ さらに、教育ファームの取組は、取組実践者や取組が行われる地域全体へも良い効果を及ぼしています。農林漁業者においては自らの業に対する意欲や研究心の高まり、学校においては先生同士の連携力の向上や子どもの個性に対する理解の深まりといった効果が確認されており、「地域との協力関係が深まった」「地域全体の活気が増した」といった地域への効果が確認されています。
- ・ 加えて、高校生や大学生が農林漁業体験活動の実践者側のスタッフとして参加し、その体験を農学系、栄養士養成系、教員養成系の大学学部、専門学校等への進学や就農、教員への就職など自分の進路選択に繋げている事例があることから、教育ファームは学生等に対する社会教育の効果があることが考えられます。

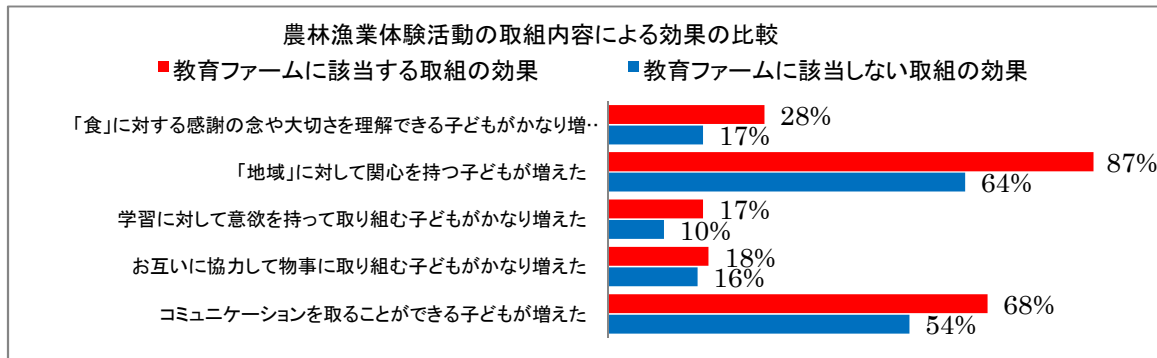
◎教育ファームの取組に係る子どもたちへの効果

教育ファームの取組は、「お互いに協力して物事に取り組む」や「コミュニケーションをとる」子どもが増えた等の子どもたちに高い効果がみられる。(複数回答)

【小学校の場合】



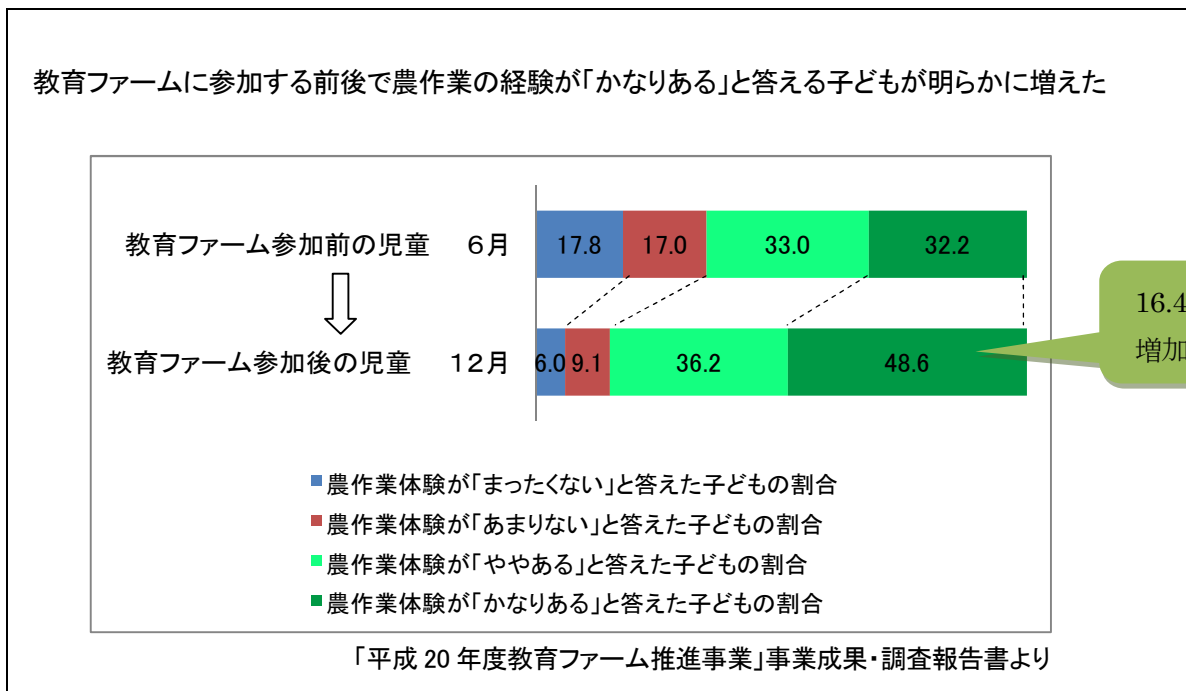
【中学校の場合】



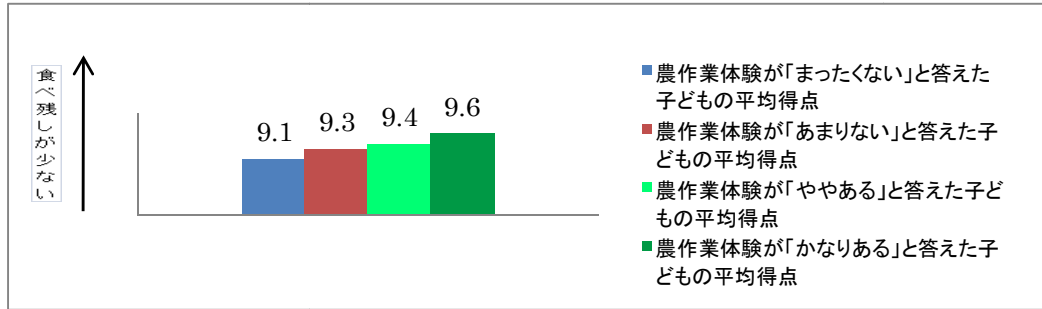
※ 九州各県小・中学校アンケート結果より(平成22年度九州農政局実施)

◎農作業体験による子どもの変容

教育ファームに参加すると農林漁業が「かなりある」と答える子どもが明らかに増える。さらに、体験が「かなり」多いと回答した子どもには、「食べ残しが少ない」や「農業に対する理解がある」「郷土への親しみを持っている」「何事にも一生懸命取り組む」「自分のことは自分で決められる」等の変容がみられる。



農作業体験が「かなりある」と答えた子どもは、食べ残しが少ない



質問内容

(以下の質問について子どもたちへの質問の回答で「まったく当てはまらない」:1点~「とてもあてはまる」:4点のポイントを付与する。

4点×3問=12点満点/1人)

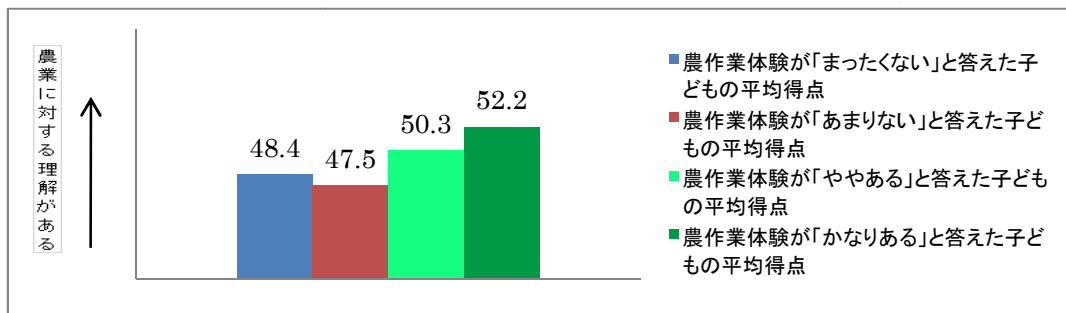
1. 食事はいつも残さず食べる
2. 好き嫌いせず何でも食べる
3. 食べ残しなく、きれいに食べる(例えば、ご飯粒も全部食べる)

※得点方式分析:各質問について「まったくあてはまらない」:1点、「あまりあてはまらない」:2点、

「ややあてはまる」:3点、「とてもあてはまる」:4点として、それぞれのポイントを付与して算出。

「平成20年度教育ファーム推進事業」事業成果・調査報告書より

農作業体験が「かなりある」と答えた子どもは、農業に対する理解がある



質問内容

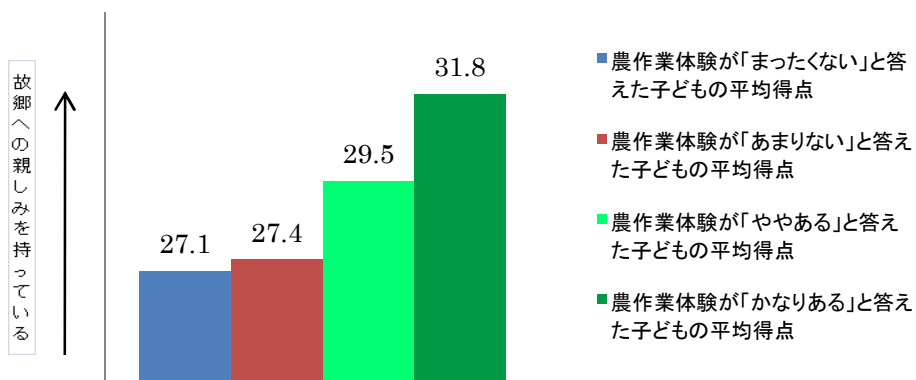
(以下の質問について子どもたちへの質問の回答で「まったくあてはまらない」:1点~「とてもあてはまる」:4ポイントを付与する。

4点×16問=64点満点/1人)

- | | |
|---|------------------------------|
| 1. 米や野菜、果物などを育てるには、多くの時間がかかる | 9. 米や野菜、果物などを育てるには多くの手間がかかる |
| 2. 農業は、自然を守りながら行うものである | 10. 米や野菜、果物などの収穫は、天候により左右される |
| 3. 米や野菜、果物などを育てるには、様々な人の協力が必要だ | 11. 米や野菜、果物などを育てるのは楽しい |
| 4. 農業は、わたしたちにとって大切な仕事である | 12. 将来、農業に関わる仕事がしたい |
| 5. 買い物に行ったり食事をしたりするとき、その作物がどこでどのように作られたものかが気になる | 13. 米や野菜、果物などを育てるのが好き |
| 6. 農家の方々のおかげでわたしたちは食べ物を食べることができる | 14. 農業の大切さを多くの人に伝えたい |
| 7. 農業の体験をしたい | 15. 米や野菜、果物などを育てるには、体力が必要だ |
| 8. 農業の体験をするとき、服や手などが汚れるのが気になる | 16. 家族に、農業を教えたい |

「平成20年度教育ファーム推進事業」事業成果・調査報告書より

農作業体験が「かなりある」と答えた子どもは、郷土への親しみを持っている



質問内容

(以下の質問について子どもたちへの質問の回答で「まったくあてはまらない」:1点~「とてもあてはまる」:4ポイントを付与する。

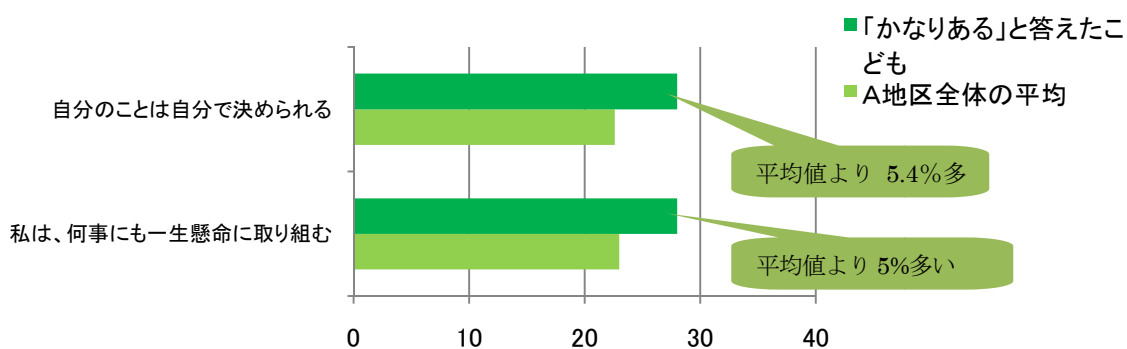
4点×16問=64点満点/1人)

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1. 自分の住んでいる地域が好き | 6. 自分の住んでいる地域でとれる食べ物が何か知っている |
| 2. 自分の住んでいる地域でとれる食べ物をよく食べる | 7. 地域のお祭りや行事に参加する |
| 3. 地域のお祭りや行事を知っている | 8. 自分の住んでいる地域でとれる食べ物はおいしい |
| 4. 大人になってもこの地域に住みたい | 9. 食べ物を食べる時、季節を感じる |
| 5. 近所のおじさんお婆さんとよく話す | 10. 自分の住んでいる地域でとれる食べ物が好き |

※得点方式分析:各質問について「まったくあてはまらない」:1点、「あまりあてはまらない」:2点、「ややあてはまる」:3点、「とてもあてはまる」:4点として、それぞれのポイントを付与して算出。

「平成20年度教育ファーム推進事業」事業成果・調査報告書より

農作業体験が「かなりある」と答えた子どもは、ライフスキル(生きるたくましさ)を身につけている。



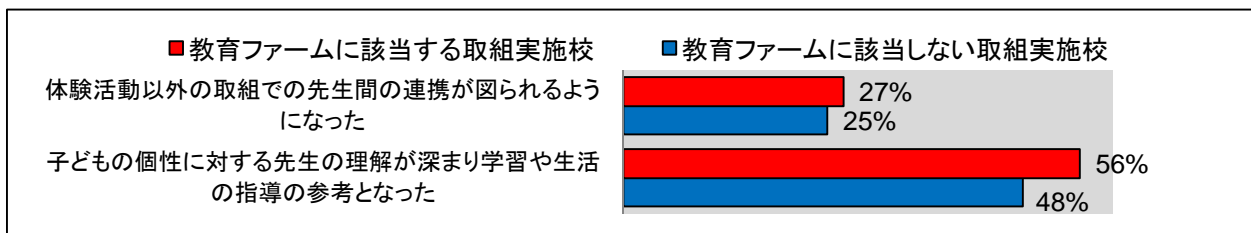
※A地区は調査対象地区(教育ファームに参加している学校と参加していない学校が存在)

「平成20年度教育ファーム推進事業」事業成果・調査報告書より

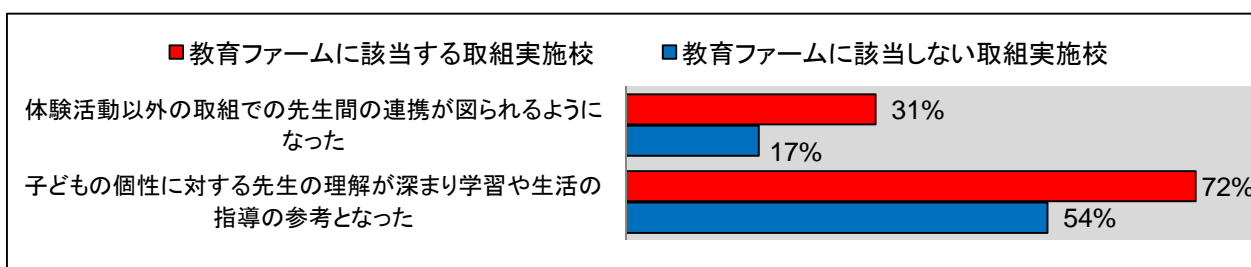
◎教育ファームの取組に係る実践者への効果

●教育ファームに該当する取り組みを行っている場合は、そうでない取り組みの場合に比べて、学校に対するより高い効果がみられる。(複数回答)

【小学校の場合】



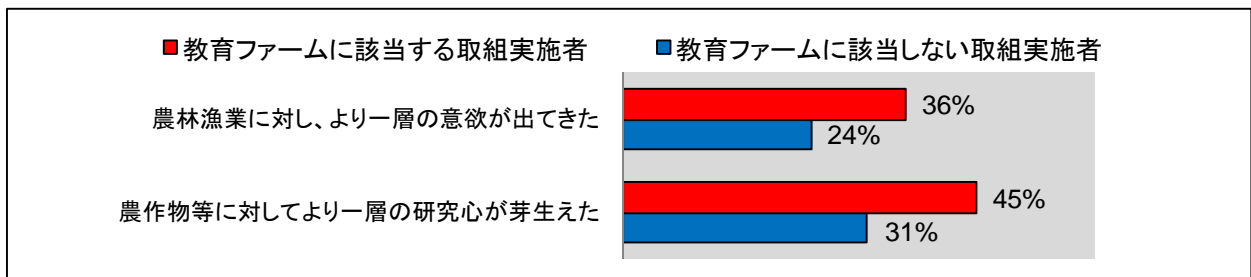
【中学校の場合】



※ 九州各県小・中学校アンケート結果より(平成22年度九州農政局実施)

●教育ファームに該当する取組を行っている場合は、そうでない取組の場合に比べて、取組実践者にとってより高い効果が見られる。(複数回答)

【農林漁業者の場合】

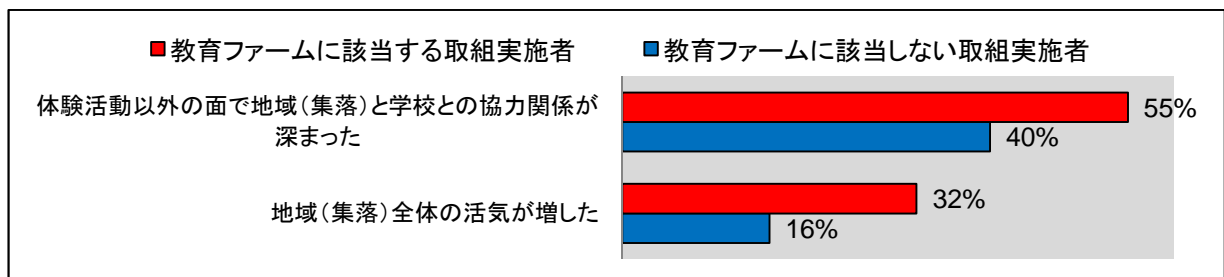


※ 平成22年度農林水産情報交流モニターアンケート結果より

◎農林漁業体験活動に係る地域への効果

教育ファームに該当する取組を行っている場合は、そうでない取組の場合に比べて、地域(集落)にとって、より高い取組の効果がみられる。(複数回答)

【食品事業者の場合】



※ 平成22年度農林水産情報交流モニターアンケート結果より

2 教育ファームの取組及び参加の意向

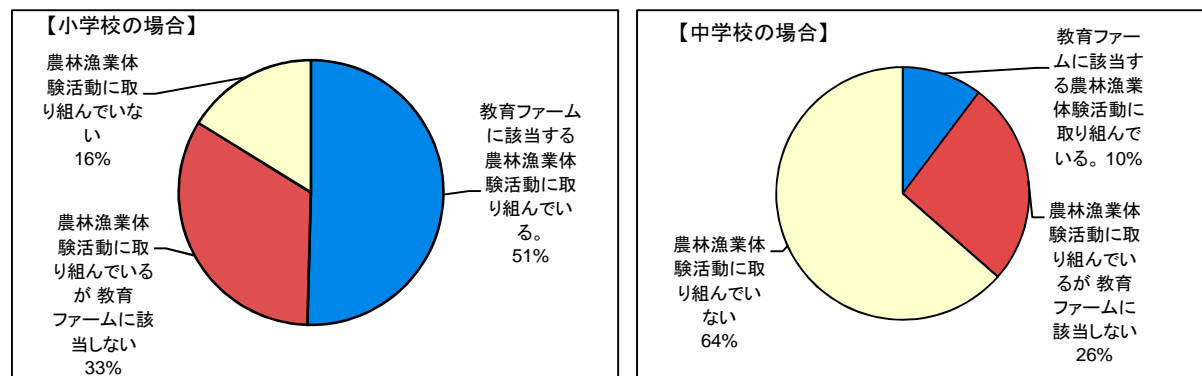
教育ファームの取組は、学校における取組とそれ以外の取組に大きく分けることができます。

- 学校における農林漁業体験活動の実施状況を見ても、小学校においてはほとんどの学校が取り組んでいます、中学校においては実施校は半数以下となっています。

更に、教育ファームに該当する農林漁業体験活動となると、小学校は半数程度、中学校においては1割程度に減ってしまいます。

農林漁業体験活動に取り組んでいない学校も、取組に否定的なわけではなく、半数以上に取組み検討の意向があります。
- 学校以外における農林漁業体験活動の実施状況について見ても、取組を実施している農林漁業者や食品事業者は少数派であり、教育ファームに該当する取組となるとごく少数となってしまいますが、学校と同様、今取り組んでいない事業者でも取組を検討してみたいと考えている方は多いようです。消費者側も、農林漁業活動に参加してみたいという方が多く、ニーズがかなり高いことが解ります。

◎学校における農林漁業体験活動の実施状況

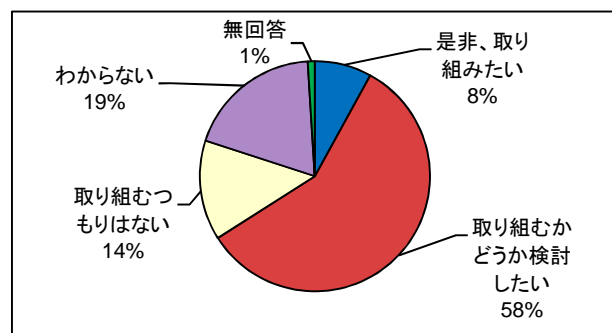


※ 九州各県小・中学校アンケート結果より(平成22年度九州農政局実施)

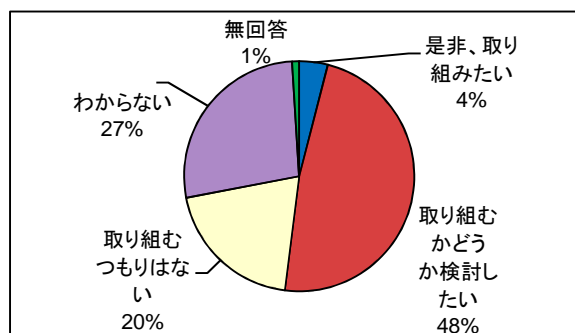
◎農林漁業体験に係る取組の意向

農林漁業体験活動に取り組んでいない学校の多くが、取組みに対して 前向きな意向を持っている。

【小学校の場合】



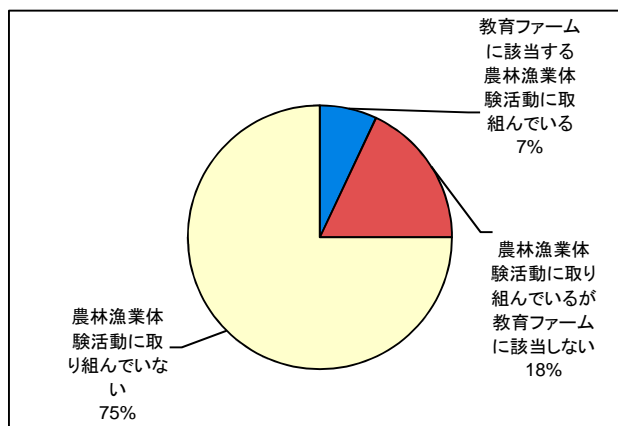
【中学校の場合】



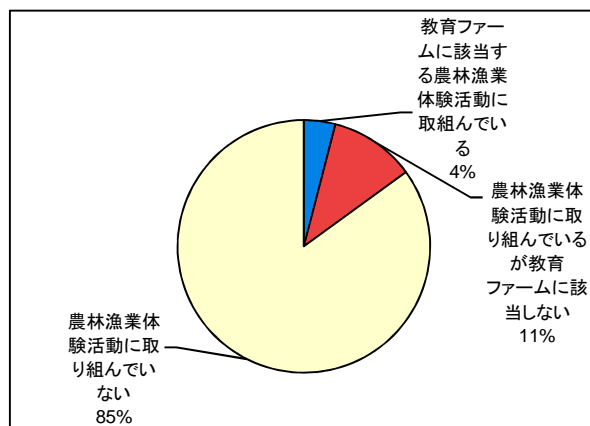
※ 平成22年度農林水産情報交流モニターアンケート結果より

◎農林漁業者及び食品事業者における農林漁業体験活動の実施状況

【農林漁業者の場合】



【食品事業者の場合】

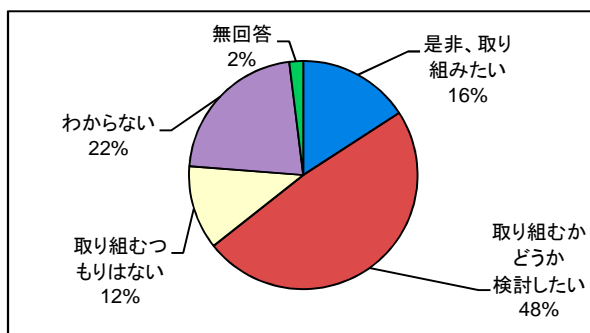


※平成22年度農林水産情報交流モニターアンケート結果より

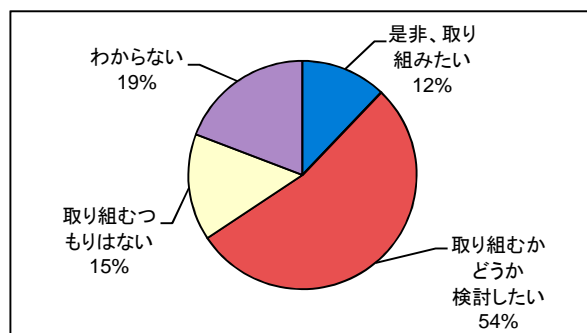
◎農林漁業者及び食品事業者の農林漁業体験に係る取組の意向

農林漁業体験の取組を行っていない生産者、食品事業者の多くが、取り組みに対して 前向きな意向を持っている。

【農林漁業者の場合】



【食品事業者の場合】

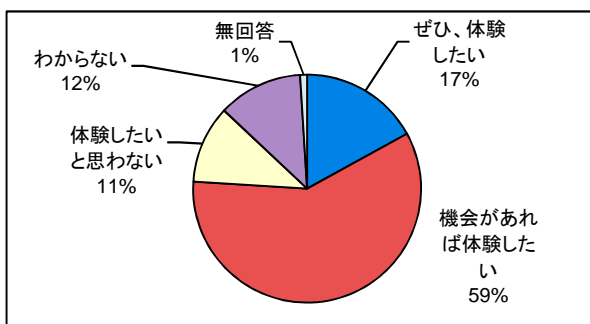


※平成22年度農林水産省情報交流モニターアンケート結果より

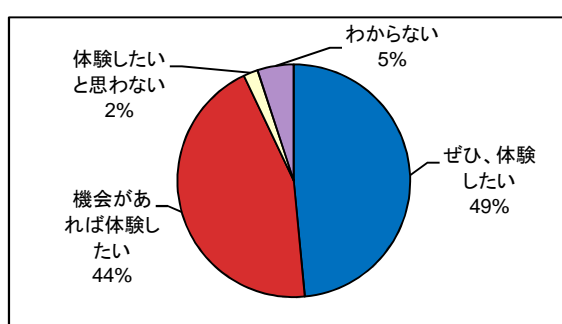
◎消費者の農林漁業体験への参加意向

消費者の多くは、参加を希望するとともに子どもや孫を農林漁業体験へ参加させたいと考えている。

【自分自身の体験の意向】



【子どもや孫に対する体験の意向】



※平成22年度農林水産省情報交流モニターアンケート結果及び一般消費者アンケート結果より

3 教育ファーム推進に係る基本認識

このように、教育ファームについては、高い効果が確認されており、教育ファーム等の農林漁業体験活動については、取組側も参加者の側も取組に前向きであることが解ります。食とそれを支える農業・農村への理解を深めていくためにも、子どもたちの「生きる力」を育てていくためにも、教育ファームの取組を広げていくことが必要です。取組の障害となっている課題を解決すれば、取組は大きく広がっていくことが期待されることから、課題の解決の仕方を考え、これに取り組んでいくことが重要となっています。

Ⅲ 九州地域の教育ファーム推進に当たっての課題と対応方向

教育ファームを推進していくうえでの課題とその対応方向として以下のようなものが考えられます。

1. 指導者や体験の場の確保への対応

○課題

- ①学校や食品事業者が教育ファーム等の農林漁業体験活動に取り組む場合、体験活動の指導を御願ひする農林漁業者の確保や、体験活動の場としての農地等の確保が負担となっています。
- ②多くの取組実践者は、農林漁業体験活動の内容を充実させていくためにも、地域からの協力を必要としています。
- ③小学校から中学校に進むにつれ教育ファームの実施率が減少する等、年齢層が上がるにつれて教育ファームの体験の場が少なくなります。ライフステージに応じた間断ない食育が実施されていないという問題があります。

○論点

指導をお願いする農林漁業者も、体験の場としての農地等も、まずは地域において協力を確保することが基本になると思われます。以上のことから、こうした課題の解決や、体験活動の充実化のために、教育ファームへの取組を実践する方たちが、地域関係者の協力を得やすくするための対応策が必要です。

○対応方向

対応方向としては、以下のような対策が考えられます。

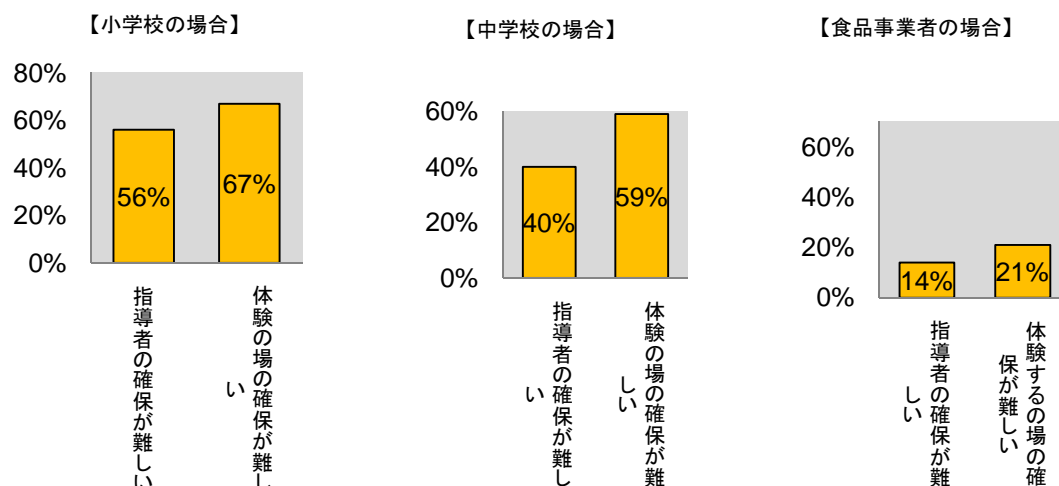
- ①教育ファームの推進方法等について、課題の洗い出しやその解決方法を地域関係者が話し合い調整を図っていくために、地域関係者が協議する場の設置が必要です。実際に協議の場がある地域では教育ファームの取組が進んでいます。市町村単位又は校区単位等の地域において、協議の場があることが望まれます。農地の確保については地域関係者が話し合い、耕作放棄地を活用する仕組みを作り、耕作放棄地対策としても実績を上げている事例もあります。こうしたことは、地域関係者が話し合う場があつて可能になると思われます。
- ②地域関係者が課題解決に向けて基本的な方向性を協議していく場以外にも、個別の農林漁業体験活動において、指導者としての農林漁業者や農地等の体験の場の確保について、取組実践者と農林漁業者等との間を仲介をする組織があることが望ましいと思われます。

現状の農林漁業体験活動では、指導や農地活用等の御願いについては、取組実践者の方々個々人の属人的ネットワークに依存していることが多く、学校などでは熱心な先生の転校等によってこうしたネットワークが途絶え、取組が後退してしまうこともあるようです。教育ファームの活動を持続的な広がりをもった活動としていくためには、仲介組織の存在が望まれます。

- ③ライフステージに応じた中断ない食育を推進し、生涯食育を構築するためには、農業体験を含めた食育における幼・保・小・中・高・大の連携を地域で進める必要があります。こうした連携により、実施される高校生や大学生による小学生の農業体験のサポート等が、地域における指導者や農地等の体験の場の確保にも繋がることから考えられます。

◎取組を行っていない学校・食品事業者における指導者及び体験の場の確保に係る問題

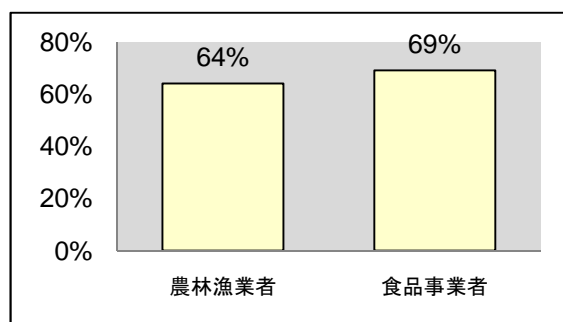
学校や食品事業者にとって、「指導者(生産者)」や「体験の場(農地等)」を確保することが負担になっている。(複数回答)



※九州各県小・中学校アンケート結果及び平成22年度農林水産情報交流モニターアンケート結果より

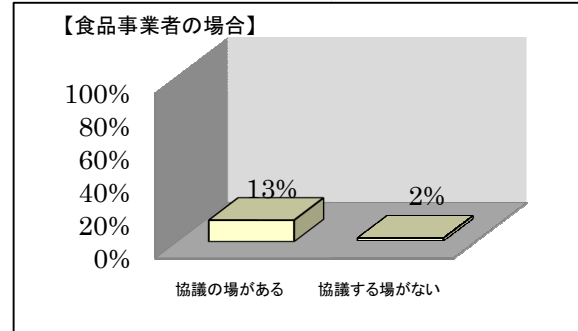
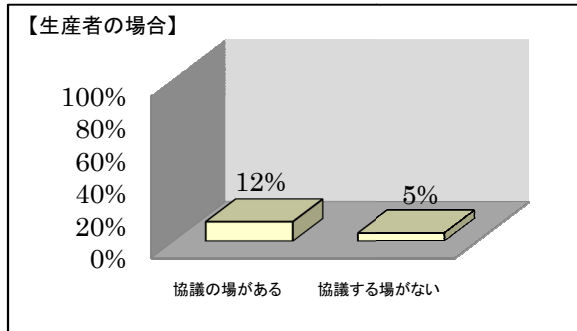
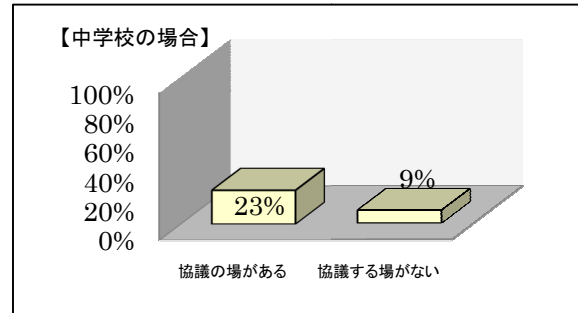
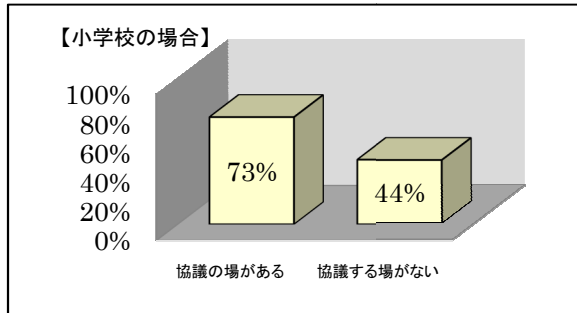
●生産者や食品事業者の多くは、取組の充実のために地域からの協力を必要としている。

取組の充実のために地域からの協力を必要としていると回答した生産者・食品事業者の割合



※平成22年度農林水産情報交流モニターアンケート結果より

●地域に農林漁業体験に係る協議の場があれば、教育ファームは進む。



※ 九州各県小・中学校アンケート及び平成 22 年度農林水産情報交流モニターアンケート結果より

○指導者としての農林漁業者を紹介している事例

＜佐賀県「ふるさと先生」の取組＞

① 「ふるさと先生」制の導入

平成 18 年度より、「食農教育」推進の一環として、「ふるさと先生」制度を導入。

農林漁業に関する体験活動や食文化の伝承等に関する指導者を公募し、県内6地域に設置した「さが“食と農”絆づくりプロジェクト地区推進会議」(窓口:各地域の農業改良普及センター)において「ふるさと先生」として登録。

② 「ふるさと先生」の取組

地域において、農作業体験や郷土料理体験等を希望する保育園や学校、消費者グループ、子育て支援センター等の団体等は、地域の農業改良普及センターに対し、「ふるさと先生」の派遣の申請を行い、申請を受けた農業改良普及センターは派遣希望内容に応じて、登録されている「ふるさと先生」から選定して派遣希望団体等に「ふるさと先生」を派遣。

また、指導力等の向上のため、各地域農業改良普及センターでは、「ふるさと先生」登録者が必要な知識、技術の習得ができるよう、食農教育の実践者・農業者・教育関係者・栄養士・行政関係者等を講師とするスキルアップ研修会を実施。

③ 「ふるさと先生」の取組実績

平成 22 年度末の各地域の農業改良普及センターにおける「ふるさと先生」登録者数は 201 名となっており、年々増加。また、派遣実績は、平成 23 年 2 月末で 383 回(派遣者数・延べ 607 人、講座受講者数・延べ 16, 305 人)となっており、年々増加。

<鹿児島県の食育支援体制の取組>

○取組の趣旨

子どもたちをはじめ県民の方々が、身近にある農林水産業や食の関連産業の現場に触れ、自然の恩恵や食に係わる人々の様々な活動と食の成り立ちを肌で感じ、食への理解が深められるよう、関係機関・団体等が連携し、「食育支援体制」を整備。

○取組内容

①各地域振興局・支庁の農政普及課において、地域の教育機関など関係者と連携して支援体制を整備し、農林漁業者や食品関連企業等の食育支援リストを作成。(支援登録数705個人・団体)

学校や食育に取り組む意向がある方から要望があった場合は、取組の内容により振興局の担当者がリスト登録者から選定して取組希望者に食育支援者を紹介。

②支援内容としては、

- ・生産活動(農林漁業体験活動)
- ・学校への出前授業
- ・農林水産物等を利用した調理・加工の体験
- ・施設見学
- ・情報提供

○平成22年度実績

- ・ 支援実施校 : 81 校
- ・ 支援回数 : 192 回
- ・ 支援人数 : 8,277 人



○農業高校の敷地内農園を活用した農作業体験活動の取組事例

<宮崎県立宮崎農業高校の取組>

○取組の目的

宮崎県立宮崎農業高校は宮崎市の中心部に位置している。

近隣の小学生や保護者より、農業や食に対して触れあう機会が少ないことから、食農体験に対するニーズが高まっていた。

そこで、小学生を対象にした教育ファームに生徒が中心となって取り組むことで、小学生はもちろん、生徒たちの農業や食への理解を深めることを目的に取組を実施。

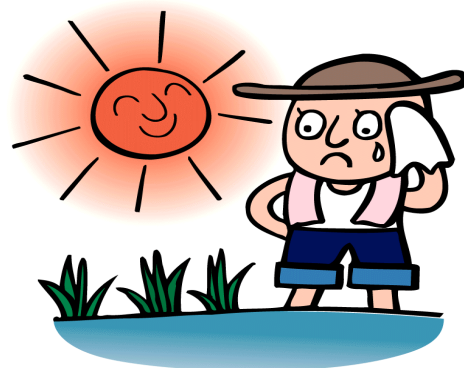
○主な取組

宮崎市内の小学生を中心に、一般公募による教育ファームを実施。取組の規模は参加者約30名で、野菜の種まきから収穫・調理体験を1セットとしており、農作物を育て食卓に上がるまでの行程を体験できるようにしている。

圃場は学校の実習畑を活用し、参加の子どもを1グループ5～6名程度に分け、1グループに1名の農業高校の生徒を配置して小学生の指導に当たっている。

○取組による効果

参加した小学生が種まきから収穫・調理までの作業を行うことで、農業や食の大切さ等への理解が深まるほか、生徒たちが先生役として小学生を指導することで、リーダーシップ、企画力、説明力が養われる等の教育的効果も見られた。



○保育園と地域関係者の連携による取組事例

<小鳩の家保育園の取組>

○取組の目的

農の体験と食の体験を通じて、生産から食卓までの一つの流れを体験することで、仕事を進める上での計画性や積極性など基本を体得し、自然環境や食べ物を大切にするとともに、仕事に前向きな人間としての基礎を培うことを目的に取組を実施。

○主な取組

- ①地域の農業青年で組織する「武友会」の指導を受けて、田植えから稲刈り、餅つき等の体験を実施。
- ②有機農業に取り組む農業者グループ「オアシス会」の協力のもと、借り入れた保育園近くの畑とオアシス会会員の畑を使って野菜の植え付けから収穫までを体験。
- ③野菜栽培の際に、武雄区老人クラブの方々が園児と一緒に農作業を行い、子どもたちのペースに合わせて優しく指導をいただいている。

○取組の目的

- ①米作りの体験田とは別に、保育園内に黒米の体験田を整備して、園児たちが日常的に稲の生長過程を観察できるようにしている。
- ②野菜作りは、通年での取組と農作物の「旬」について理解を促すため、旬の時期が異なる春野菜と秋野菜に分けて栽培している。

○取組の効果

- ①農や食の作業を協力団体の大人たちと協働していく過程は、子どもたちに実体験の成果として刷り込まれ、豊かな感性を醸成してくれている。
- ②運動会やお遊戯会などの保育園の年行事の取組でもプログラム進める中で協力して作業を行うなど社会性の面からも教育ファームの成果が見え始めている。
- ③保育園は「地域の子育てセンター」としての役割を担うことを求められている。教育ファーム等の農関連事業を進めることで、多様な近隣の関係者との交流が広がり、その連携・協働の中で、「地域子育てセンター」としてオープンな保育園運営に繋がっている。

